

「流量のお話」執筆の背景

2015年10月 計装プラザ代表 佐鳥聡夫（さとりとしお）

本文は信号変換器・避雷器・リモート I/O の専門メーカ、エム・システム技研株式会社 <http://www.m-system.co.jp/> 広報誌 MSTODAY の 2001 年 7 月号から 2002 年 4 月号まで 12 回に渡って連載されたものです。

エム・システム技研の宮道繁社長（現会長）は、私が 1961 年に旧北辰電機製作所（1983 年に横河電機と合併）に入社したときの先輩社員で、その後エム・システム技研を創業され、私も定年前に自営業に転じました。旧職場の縁で親しく交際は続いていましたが、ある日、「わが社の広報誌に流量計の入門記事を書いてみないか。ただし、毎回二三ページの読み切りで、代理店の情勢社員にも分かること」との提案を受けました。

「書きましょう」と引き受けてはみたものの、いざ始めると意外に難しいのに気付きました。計測対象と計測目的により流量計の種類は種々雑多で、動作原理や長所短所も異なります。また、各種流量計の解説をするだけでなく、目的に合った機種を選び方やトラブル対応についても少しは触れぬと、記事を読んでも役に立ちません。しかも、専門用語をなるべく使わず限られた紙面で開設するのは本当に頭を絞る作業でした。

余談になりますが、後に私が子供のための理科教室代表を務めたとき、指導者の元大学教授が、「専門用語を一切使わず、力学の概念を低学年の子供に伝えるのは大学の講義よりはるかに難しい」とこぼしていました。簡単な話なら楽に書けるのではないのです。

余談はさておき、本文を寄稿したのは今から 15 年前。その後エレクトロニクスの進歩と共に、電子技術を多用する流量計のコストダウンが進み、機種別のマーケットシェアも変わりました。しかし、差圧式や面積式など流量計の歴史の初めから存在した機種は、「こんな古臭いものはすぐに消え去る」と言われながら、今日でもしぶとく生き残っています。単純な流量計は安全確保の最後の手段だからでしょう。

なお、機種別の正式名称はその後（一社）日本計量機器工業連合会の規格 JMIF-013「流量計用語」によって、差圧式流量計→差圧流量計、面積式流量計→面積流量計、容積式流量計→容積流量計、熱式流量計→熱式質量流量計、コリオリ式流量計→コリオリ式質量流量計と定められました。

適当な入門書が見当たらない現在、この小文は今でも多くの方々がお読みくださるようです。ご不明の点は遠慮なく無料相談窓口をご利用ください。

以上